

朗 読 文

鹿児島湾をはさんで、薩摩半島と相対する大隅半島は古代から「天離る大隅の国」と万葉集にも歌われた僻遠の地であった。薩摩半島が早くから開け、南九州の農業中心地となっていたのに比べて、大隅半島の開発は遅く、特に南部は「陸の孤島」と呼ばれ、明治の初期、薩摩半島からの移住者によってようやく開拓の火が灯されたほどであった。

それだからこそ、人の手のつかない美しい自然が今も残り、佐多岬は太古の面影を色濃く宿す岬として近年、観光地としてクローズアップされてきた。

インドのニューデリー、エジプトのカイロ、アメリカのフロリダ半島と同じ北緯三一度線上にある佐多岬の年間平均気温は一九度。まさに常夏の岬である。薩摩半島には南端まで指宿枕崎線が通っているが、大隅半島の南半分はバスしかない。大隅線鹿屋から大泊を経て、岬の先端までは約三時間の道程。桜島を右手に眺め、錦江湾沿いのひなびた漁村を縫って岬に近づくと、佐多岬ロードパークに出る。大泊から岬の突端近くに至る九キロ余りの有料道路で、道の両側にはフェニックス、ソテツ、バナナなどの亜熱帯樹が緑の葉をそよがせ、だんだん強く感じられる陽の光に、南国情緒は盛り上がる。バスの終点から岬の突端までは、さらにうっそうと生い繁る亜熱帯樹のジャングル。ガジュマル、ビロウ、ホルトノキ、ヘゴ、クワズイモ、ゴム、アコウ、ソテツ・・・ソテツはこの一帯が北限といわれ、本州では珍しい自生地として国の特別天然記念物指定を受けている。ジャングルの間を縫うプロムナードを行くと、温室でしか見られないような樹々が伸び伸びと枝をいっぱいに成育し、その野性的な感覚に、何処か遠い異国にでもやって来たかのような錯覚にさえ陥る。ジャングルの中にはブーゲンビリア、ハイビスカスなどが絢爛と咲き誇りツマベニチョウ、ミカドアゲハ、リュウキュウムラサキなどの珍蝶が南国の燃えるような花々の間を幻想的に飛び交っている。

岬の展望台からの眺めは雄大の一言に尽きてしまう。足下の断崖には黒潮の怒濤が白く泡をかんで打ち寄せ、眼前に浮かぶお碗を伏せたような大輪島には白亜の灯台が青い海原を背景にひとり浮かび上がる。明治二年、イギリス人技師によって建てられて以来、幾星霜を耐え抜いて沖を航行する船に光を投げ続けてきた古強者である。遙かな沖合には種子島、屋久島、竹島、硫黄島、黒島の五つの島影が青く浮かび、最果ての島々への夢をかきたててくれている。

しかし、岬のあらゆる自然の風物の中で、最も壮大で雄渾な眺め——それはタカの渡りである。毎年秋になると、本州から渡って来るサシバというタカが群れをなして岬の原生林に舞い降りてくる。十分に休養と餌をとって長い旅路に備えるために。そして、やがて再び群れ立って沖繩、台湾、マライ、さらに遠くニューギニア諸島を目指して岬から飛び立ってゆく。